

図書紹介

「ワクチンは怖くない」

著:岩田健太郎 (神戸大学病院)

発行:榊光文社 / 〒112 - 8112 東京都文京区音羽 1-16-6 / ☎03 - 5395 - 8113

新書判 / 236 頁 / 定価 740 円 (税別) / 2017 年 1 月 17 日発行

ワクチンは医学の歴史上、最高の発明品である。その医学上の役割は抗生物質の役割を凌駕するものがある。それにも関わらず、我が国では、ワクチンの役割が過小評価されているのは残念である。本書は同じ著者による『予防接種は「効く」のか ワクチン嫌いを考える』に続く光文社新書の医学シリーズの一つである。極めて歯切れの良い著者の語り口には；思わず引き込まれてしまうワクチン学の優れた啓蒙書である。

本書は以下のような構成になっている。

はじめに

第 1 章 子宮頸がんワクチンとメディア—ワクチンの現在

- (1) 子宮頸がんワクチンを総括する
- (2) ワクチンとメディア

第 2 章 感染症と戦う—ワクチン・免疫とは何か

- (1) ワクチンと免疫
- (2) 日本のワクチン

第 3 章 「あなたの健康」を目指せ！—ワクチンの未来と理念

- (1) 脅威となる感染症
- (2) ワクチンの未来を語る

参考文献

あとがき

最も多くのページが割かれているのは第 1 章の「子宮頸がんワクチンを総括する」であり、本書の中心をなしている。子宮頸がんは主にヒトパピローマウイルス (HPV) 感染によって引き起こされるところから、ワクチンの抗原には HPV 表皮蛋白が使用されており、HPV ワクチンとも呼ばれている。我が国では、本ワクチンは 2009 年に厚労省の承認を受け、2013 年から定期接種ワクチンとして多数の少女たちに接種された。不幸なことに、本ワクチンの接種を受けた少女たちに深刻な神経症状の発症が報ぜられ、現在、患者の家族がワクチンメーカーと国を訴える事態に至っている。上記の神経症状の発生がワクチンの副作用によるものか、ワクチンとは無関係の「紛れ込み事故」によるものかは確定していない。

こうした情勢下で、子宮頸がんワクチンの副作用を調査する研究事業発表会で、子宮頸がんワクチンに批判的であった I 教授が本ワクチンは危険であるとした研究発表で、データの不正操作をしたとする疑惑が持ち上がった (詳細は本書を参照)。また、厚労省も I 教授の発表に厳しい批判を呈している。子宮頸がんワクチンの批判派に不利な状

況にある。関連して著者は第1章の最後に、I教授の研究発表をあたかも真実であるかのように報道した我が国のメディアを批判して、ジャーナリストは批判的吟味を行う第一の人物であるべきだと常々思っている；日本のラージメディアのジャーナリストには、そうした精神が全く観察できない；と厳しい言葉を綴っている。著者は子宮頸がんワクチンに批判的なグループの人たちにも厳しい言葉を述べているが、同時に日本では行政サイドでのワクチンの啓蒙活動が欠落していることも指摘している。

第1章に続く第2章と第3章では、前半には免疫学やワクチンの解説、並びに我々が直面している感染症の脅威が、それぞれ紹介されている。後半は日本のワクチンとワクチンの未来が語られている。前半は現在、話題になっている免疫学や感染症学の簡潔な纏めになっており、極めて有益な解説になっている。

第2章の後半の日本のワクチンに関しては、同時接種の問題や新ワクチンの承認などで、日本は外国に比べて1周も2周も遅れていることが指摘されている。また現在は、65歳以上の高齢者には肺炎球菌ワクチンが定期接種になっており、公費でのワクチン接種が可能になっているが、酷い運用になっていることも指摘されている（定期接種としてワクチン接種が受けられるのは、5歳刻みで65、70、75、80歳…となっており、該当する年齢の人しか、定期接種として受け付けてもらえない）。著者の主張はもったもめで、早急な改善が求められる。

最後のワクチンの未来の中では、ピロリ菌やコレラ菌のワクチン開発など、個々のワクチンにも言及しているが、著者が最も力説しているのは、日本の予防接種行政の根本的な制度改革である。結論を先に記すと、かねてからの著者や大谷明博士（元国立感染症研究所所長；故人）が主張してきた日本版ACIPの設立の提案である。予防接種先進国のアメリカでは独立した政府組織としてACIP（予防接種諮問委員会）が設置・活動しており、予防接種全体に対して具体的な提言を行い、ワクチン全体に関する啓蒙活動も行っている。ACIPでの討論は公開になっており、その結論は尊重されている。日本版ACIPが設立・活動しておれば、上記のようなワクチンを巡るトラブルの多くは防げたとする著者の主張は傾聴に値する。

本書は一般向けのワクチン解説書として優れた成書と考え、強く推薦する。著者の主張は明快で一貫しており、語り口も平易で読みやすい。ただし、「ワクチンは怖くない」という本書の表題は、ワクチンを怖がる人が多い日本の現実を思うと悲しくなる。

（国立医薬品食品衛生研究所 三瀬勝利）